

書 評

日本城郭史学会会報「城郭だより」平成22年10月1日第71号（5）の『最近の注目される城郭関係図書から』に

『図版でみる江戸時代の測量術』が掲載されました。

城郭史を学ぶにあたっても「測量」は興味深く、大切であることを紹介していただきました。

第71号（5）

城郭だより

平成22年10月1日



最近の注目される

城郭関係図書から

瀬戸島政博著

『図版でみる江戸時代の測量術』

工学博士で（社）日本測量協会常務理事として測量学の第一人者かつ史学会の会員である瀬戸島氏によりこの度月刊『測量』の別冊として本書が刊行された。

城絵図や江戸切絵図が、今日の市街図と比べるとほぼ正確であったり、そのまま現地でも使用できる絵図であったりする。伊能忠敬による日本全体の測量地図がほぼ完璧に近いでさえあることは、みなが知る処だ。しかし伊能図の測量法はもとより、それ以前の絵図作成にも日本独自の手法による測量がなされていたことを本書は図入りで解説する。広く歴史を学ぶ者に一読をお奨めできる好著である。

江戸時代の測量は量地術、町見術、規矩術などと呼ばれた。中国では天をはかることを「測る」、

地をはかることを「量る」といい、「測天量地」と称された。將軍吉宗代から日本で測量という言葉が用いられたという。

城郭史を学ぶ者にとって「正保城絵図」に代表される絵図の作成はどのように行われたか。最も知りたい処である。本書では「絵図作製のための測量方法の一つだけではなかった」。対象となる地域の広狭によって「方法が異なっていた」と記す。国・郡絵図では盤針術により道筋、海岸線を測量。城絵図では曲がり角の道筋に見盤を据えて、長さ、幅を厳密に実測したようである。盤針術とは方位を測り、三角比で図化。見盤とは水平を求めた盤を据え図化する方法である。いわば三角点測量の方法であり、レベル測量を加味したものと考えられる。

歴史的にみて、近世社会土地制度の仕組みの根元をつくった太閤検地は、一間幅の統一を行い、三角測点と十字法による体積を求めた。この検地方法にも詳述される。検地と共に興味があるのが玉川上水にみられる測量術であるが、本書では多くの図版を駆使して測量法を紹介している。

（社）日本測量協会刊（文京区小石川一、三、四）価八〇円＋送料）

（日本城郭史学会代表 西ヶ谷 恭弘氏）

【日本城郭史学会会報「城郭だより」平成22年10月1日第71号（5）より】